

二〇二六年 一月三十一日

入学 試験 問題

国語

I

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

1

から

13

までにマークせよ。

くじ引きで代議士を選ぶ方法は、古代アテネ時代からフィレンツェ共和国・ヴェネツィア共和国を経てモンテスキュー・ルソー・ロベスピエールなどが支持した。最近くじ引き政治が再び見直されている。だが、それは成功するだろうか。偶然はその姿が露わになると機能しない。偶然である事実が人間の意識から隠され、あたかも必然のごとく錯覚される必要がある。偶然是責任を負えないからだ。神がいた時代にはくじ引きの結果が神タクとして受け入れられた。御神籤という文字にも神が入っている。単なる偶然の結果でなく、神や天のケイ示だと信じられた。だが、そのような霊力はもはや失われた。

注一  
注二  
注三  
注四  
ウィリアム・スタイロンの小説『ソフィーの選択』に劇的な場面が出てくる。アウシュヴィッツ強制収容所前で二人の子と毒ガス室への「選別」を待つソフィーにナチの軍医が残酷な提案をする。「子どもを一人だけ助けてやる。どちらかを選べ」。この惨い選択を彼女はすぐさま拒否する。だが、「もういい。二人とも向こうに送れ」と部下に告げる軍医の声を聞いて「娘を連れて行きなさい」と発作的に叫んでしまう。こうして息子の命だけが救われる。

ソフィーはどうすべきだったのか。彼女には二つの可能性しかない。一つはどちらかの子を犠牲にして、残る子の命を救う道。もう一つは選択自体を拒んで子どもが二人ともガス室で殺される道だ。ソフィーは選択し、一人を救った。しかし、それにより凄まじい良心の呵責に苦しむ。娘の死の責任を背負うからだ。乱数表やサイコロを持ち出して息子と娘のどちらを犠牲にするか決定しても罪悪感が消えない。選択は神の導きだった、運命の定めだった。こう錯覚すれば責任が外部に転

いされ、心が軽くなる。神や運命を恨めば、罪の意識の矛先が自分から逸れる。

我が子が癌に罹り、逝く。偶然ならば別の結果もありえたはずだ。なのに何故死んだのか。答えが出ないまま苦悶が続く。出来事を制御できないのは偶然でも運命でも同じだ。しかし偶然と違って運命は決定論であり、他の結末はありえなかった。運命として諦める。責任を引き受ける外部は神や天のように主体として現れなければ機能しない。隠された大きな

意志が関与すると感じる時、人は諦め、救われる。

<sup>B</sup> 偶然が必然の反意語だという常識は誤りだ。こんな例を想像しよう。宝くじ売り場の前を通りがかり、何気なく一枚買ったら当たって一億円を手にする。思いがけない偶然に驚く。次の場合はどうか。事業に失敗し、あとは夜逃げか自殺しかないと思途方に暮れる人がいる。宝くじ売り場の前を横切った時、ビルの広告をふと見上げたら「人生は賭だ」という映画のセリフが目飛び込んできた。

カ 気持ちで一枚買ってみる。それが一億円の当たりくじだった。この場合、偶然よりも運命を読み取る人が多いだろう。

世界が根拠なく偶然に生成されても人間は必然と真理を見いだす。思考実験しよう。黒玉と白玉が一つずつ箱に入っている。中を見ないで玉を一つ取り出した後、同じ色の玉を一つ加えて箱に戻す。黒玉を引いたなら箱の中は黒玉二つと白玉一つになる。この作業を繰り返す。最初は玉が二つしかないから黒玉を一つ加えると割合が半分から三分の二へと大きく変化する。ところが一〇〇〇個入った箱に玉を一つ追加しても状況はほとんど変わらない。ハンガリー出身の数学者<sup>注五</sup>ジョージ・ポリアが考えた「ポリアの壺」と呼ばれる問題だ。試行が進むにつれ、付け加えられる新情報の相対的重みが次第に小さくなる。単純化されているが人間や社会に<sup>エ</sup>チク積される記憶や解釈のモデルだ。

作業を何度も繰り返すうちに、ある一定の値に黒玉の割合が収束する。その数値を書き留めてから再び初期状態に戻して試行を繰り返す、新たな収束値を記録する。こうして試行を無限回繰り返せば、当然ながら黒玉と白玉の割合の平均値は二分の一になる。ところが各回の収束値は〇から一の間で無作為に揺れる。実験の場面を想像しよう。玉の割合が一定の値に少しずつ収束してゆく。まるで世界秩序が最初から定まっておき、真理に向かって箱の世界が進展するかに見える。だが、白玉と黒玉一個ずつの状態に戻して実験をやり直すと今度は先ほどと違う値に落ち着く。定点に収束してシステムが安定するのは今回も同じだ。<sup>C</sup>しかし箱の世界が向かう真理は異なる。

我々の世界に現れる真理は一つでも、歴史を初期状態に戻して再び展開すれば異なる真理が出現する。歴史はやり直しが

利かない。そのおかげで我々は真理を手に入れる。<sup>D</sup>真理・偶然・必然・恣意・普遍・運命・一回性・超越・意味・進歩、実は同じことだ。

言語・市場・宗教・道徳などの社会制度が成立した歴史は検証可能かも知れない。だが、そこに法則は見つからない。無根拠から出発しながら偶然を介してシステムが成立し、根拠が後追いの形で仮現する。ある定点に人々が引きつけられるように見える。ところが実際には定点が初めからあるのではない。人間が影響しあいながら生み出すにもかかわらず、真理がもともと存在していたかのような錯覚が定点生成後に起きる。真理だから納得するのではない。善き行為だから尊び、美しいから愛でるのではない。逆だ。<sup>F</sup>人間の相互作用が真善美の出現を演出する。

時間が経ち、システムがある状態に至る。現在から過去に時間を遡れば、システムが変遷した道筋がドウ定<sup>オ</sup>される。したがって最初から現在の状態が決定されていたかのように見える。だが、その道筋を法則に還元できなければ、到着点に至る道筋の情報を縮小できない。数字の羅列を考えよう。繰り返しがあれば、 $k$ ずつ加算する、加速度  $a$  をかけるなどの規則で表現できる。ところがランダムな数列は繰り返しを含まない。したがって数列を示すためには全体をそのまま書き出すしかない。未来に生じる事象を知る一番速い方法は実際にシステムがその時点に至るまで待つことに他ならない。

(小坂井 敏晶 『格差という虚構』一部変更)

注一 シャルル・ド・モンテスキュー……(一六八九〜一七五五) フランスの哲学者。主著に『法の精神』がある。

注二 ジャン＝ジャック・ルソー……(一七二一〜一七七八) フランスで活躍した哲学者。主著に『社会契約論』『エミール』などがある。

注三 マクシミリアン・ロベスピエール……(一七五八〜一七九四) フランス革命期の政治家。後に恐怖政治を行ったことで知られる。

注四 ウイリアム・スタイロン・・・(一九二五～二〇〇六) アメリカの小説家。『ナット・ターナーの告白』でピューリ

ツァー賞を受賞。

注五 ジョージ・ポリア・・・(一八八七～一九八五) ハンガリー出身のスイス、アメリカで活躍した数学者。彼にちな

んだ数学賞「ポリア賞」がある。

問一 傍線部アからオまでのカタカナ部分と同一の漢字を用いる熟語をそれぞれの選択肢の中から一つ選び、その記号を解

答欄

1

から

5

までにマークせよ。

1	ア	神タク	①	開タク	②	支タク	③	仮タク	④	潤タク
2	イ	ケイ示	①	ケイ揚	②	ケイ倒	③	ケイ鐘	④	ケイ発
3	ウ	転イ	①	イ植	②	特イ	③	示イ	④	イ階
4	エ	チク積	①	構チク	②	含チク	③	鬼チク	④	放チク
5	オ	ドウ定	①	帯ドウ	②	ドウ察	③	殿ドウ	④	ドウ程

問二 空欄

カ

に入る語句として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

6

に

マークせよ。

6

- ① 薬わらをも摺つかむ
- ② 大船に乗った
- ③ のどから手が出る
- ④ 清水の舞台から飛び降りる

問三 傍線部Aに「責任を引き受ける外部は神や天のように主体として現れなければ機能しない」とあるが、それはどうい

うことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 7 にマークせよ。

7

- ① すべての出来事を神のおぼし召しと捉えたり、行く末を天に委ねたりすることによってしか、過酷な現実の帰結から人々が救われる方法はないということ
- ② 現実が生じた重大な出来事の原因を追究する際に、明確な責任主体がない偶然の帰結として済ますことはできないため、生贄いけにえが必要とされるということ
- ③ 人間は根本的に宗教的存在であるからこそ、現実が生じた事象の原因を神や天に帰することによってはじめてその結果を受け入れることができるということ
- ④ 責任を負いきれないような重大な結果を伴う場合でも、それを完全に転嫁できる明確な他者が存在しない限り、その責任から逃れられないということ

問四 傍線部Bに「偶然が必然の反意語だという常識は誤りだ」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを

次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 8 にマークせよ。

8

- ① 一般的には偶然の対義語は必然とされてはいるが、現実を考えると偶然の対義語は運命であるから。
- ② すべての事象は必然の因果関係で生じているのであり、偶然は概念上のものではないから。
- ③ 人は偶然の出来事であっても必然性を見出そうとするため、偶然は必然に飲み込まれてしまうから。
- ④ 偶然と必然とは語義上は対立する関係にあるが、現実においては両者は同一のものであるから。

問五 傍線部Cに「箱の世界が向かう真理は異なる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを

次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 9 にマークせよ。

9

- ① 確率論的に計算される値は理想的な条件の下でのみ出現するものであり、そうではない実際の実験結果においては誤差が生じること
- ② 実験による収束値は人間が考える理想的な結果からずれるにしても、個々の結果はいずれも現実世界において真の値であるということ
- ③ 追加される情報の相対的重みが次第に縮小してしまつたため、理論値から一度外れてしまつたと真の値にたどり着けなくなるとのこと
- ④ 個々の実験結果は必ず一定の値へと収斂するが、それぞれが異なっているため無限回繰り返さないと真理を見誤ってしまうということ

問六 傍線部Dに「真理・偶然・必然・恣意・普遍・運命・一回性・超越・意味・進歩、実は同じことだ」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 10 にマークせよ。

- 10
- ① われわれの現実の世界はやり直しがきかないため、そこで展開してきた事象は他の可能性が存在しないが、それを人間が後付けであれこれ解釈しているに過ぎない。
- ② そもそも世界は超越的・普遍的に神の意志や天の運命によって規定されており、そこに偶然生まれ落ちた人間は一度きりの人生に真の意味や必然性を見出ししていく。
- ③ 歴史の一回性は、偶然の積み重ねにより構築されているが、人はその展開や行方を神の意志や運命に従ったものとみなし、生じた結果を普遍的な真理とするしかない。
- ④ 真理といっても偶然の結果に過ぎないが、人はそこに必然性や運命を見出し、別の歴史や真理が存在する可能性に気づかないまま真なるものを得た気になっている。

問七 傍線部Eに「そこに法則は見つからない」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 11 にマークせよ。

- 11
- ① 社会制度にはそれぞれ独自の成立過程があるため、共通する法則は存在しえないということ
- ② 社会制度が成立した歴史は検証可能でも、それが発生した根拠はあいまいであるということ
- ③ 社会制度の成立は結果論でしかなく、それを規定する法則はそもそも存在しないということ
- ④ 社会制度は複雑な成立過程を持つため、展開の法則を確認することが困難であるということ

問八 傍線部Fに「人間の相互作用が真善美の出現を演出する」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適

切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 12 にマークせよ。

12

- ① 真善美の価値基準は抽象的でありまいなものであり、人間の社会的討議を通じて具体化される。
- ② 真善美という普遍的価値は、人間が価値基準を追い求めた結果作り上げられた虚構にすぎない。
- ③ 真善美は普遍的な価値として存在するのではなく、その内容は個々の人間によって異なる。
- ④ 真善美とは人間と無関係に存在する価値ではなく、人間が求めた結果形作られるものである。

問九 本文の主張に合致するものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 13

13 にマークせよ。

13

- ① 神とは、過酷な現実に耐えられない人間が救いを求める中で生み出された存在といえる。
- ② 歴史の展開には法則が存在しないため、それがどうなるかは事後的に確認するしかない。
- ③ 現実に生起する事象は偶然が積み重なった結果だが、それを人は真理と思い込んでいる。
- ④ 人間は無根拠な偶然に耐えることはできず、無理やり根拠を作りだす愚かな存在である。

## II

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は、解答用紙の

14

から

26

までにマークせよ。

生成AIの出力が正しかったとしても、生成AIの使用は、人間の言語をめぐる経験の最も重要な部分を毀損<sup>きそん</sup>する恐れがある。私はこのように推測している。この点を説明するためには、言語と思考の間のもも複雑な——神秘的とも言える——関係に目を向ける必要がある。

一般に想定されている因果関係は、思考がまずあって、それが言語によって表現される、という順序である。支離滅裂にしか説明できない人は、「自分の考えをよく整理してから話しなさい」などと注意されたりする。ア、ここで反省してみるとよい。どうしても語りたいたいこと、なんと少しでも聞いてもらいたいことはたいてい、語るのが難しいこと、うまく言えないことではないだろうか。語ることが困難なこと——もしかすると語り得ないこと——こそ、語るに値すること、語らねばならないことである。

イ、その語りが混乱していたり、なかなか言葉が出てこなかったりする人に関して、ただちに、その思考も混乱し、貧しいと断じるべきではない。まったく逆かもしれないからだ。つまり、その人が言いたいことがあまりにも衝撃的であったり、あまりにも繊細であったり、あまりにも豊饒<sup>ほうじょう</sup>であったりするがゆえに、うまく話することができず、口籠<sup>くろう</sup>っている、ということもあるからだ。

ウ、人がほんとうに大事なことを話すとき、その「大事なこと」は初めから、言語的に明快に分節されたアイデアとして存在しているわけではない。それでも、その大事なことについて語り始めると、しばしば次のようなことを経験するだろう。語っている最中に、自分でも思ってもいかなかった言葉が出てきて、「私の言いたかったことはまさにこれだった」と自分で発見する、ということである。思考<sup>A</sup>があつて、それが言語として外化されているのではなく、語ることを通じて、思考が明晰<sup>めいせき</sup>なものとして形成されることがあるのだ。

たとえば哲学者のバートランド・ラッセルは、書簡の中で次のようなことを述べている。自分がオットライン・モレル夫人を愛していたということを、彼女への愛を告白している自分自身の語りを聞いたときに初めて知った、と。愛への明晰な自覚があつて告白したのではなく、気づかぬうちに愛を語っている自分の声を聞いて、自分のその女性への愛を初めて発見した、というわけだ。

私たちが語ることにそれ自体に真の意味を感じ、語ることに喜びを感じるのは、このようなときであろう。まさに語ったことを媒介にして、自分の思考を発見するとき。こうしたことは、話し言葉だけでなく、書き言葉においても生ずる。書いていると、執筆前には予定していなかった言葉、思いついてさえいなかった言葉が出てくることがある。自分が書いてしまったことを通じて初めて、自分が本来書きたかったことが何であつたかを自覚する。こうした発見にこそ、書くことの快楽がある。私自身が書く理由も実のところこの点にある。私は、事前に細かく構想を練ってから執筆にとりかかる方ではあるが、それでも、まさに書き続けることを通じて、書くべきだったこと、書きたかったことを発見している。そのような発見の喜びがなければ、わざわざ書くことはなかっただろう。

フランスの哲学者ルイ・アルチュセールは、フランス語の 'prise (掴むこと)' と 'surprise (驚き)' という二つの語の間を戯れつつ、今ここで述べているようなタイプの「言語をめぐる経験」を記述している。すなわち、あるアイデアを掴む (prise) 者は、自分が成し遂げてしまったことに驚かされる (surprise させられる) のだ、と。

自分の口から出た言葉、自分の指が書きつけた文字に驚かされる?とすると、ここで奇妙なことが起きていることになる。私を驚かせているその言葉、その文字は、私の身体から発せられているのに、他者——誰とも特定できない他者——に帰属しているかのように感じられているのだ。あたかも、(不定の) 他者が、私の身体を通じて、語り、書いているかのような感覚が生じていることになる。

それにもかかわらず、つまりその言葉は、私にコントロールされた私の言葉ではなく、まるで他者の言葉であるかのよう

に感じられているにもかかわらず、私の内奥の真実、私が本来言いたかった真実を言い当てるとも感じられている。ここにあるのは、他者性と自己性の間の短絡である。

動詞のいわゆる中動態 middle voice が指し示しているのは、以上のような経験である。この経験は能動態 active voice では記述できない。つまり、私自身がその言葉を意図的に制御しているようには感じられない。しかし、受動態 passive voice にも相応しくない。つまり、私は何か外部のものに強いられて語っているわけではない。能動態でも受動態でもない中動態こそ、今述べているような言語についての体験にふさわしい。

現在のヨーロッパの諸言語からは消え去ってしまったが、古代のインドヨーロッパ語には、能動態でも、受動態でもない動詞の相、中動態があった。それは、「形の上では受動態だが、意味的には能動」となる動詞だ。ここで見ている現象が、まさにこの通りである。「私が語っている」と、エで言うほかないのだが、しかし、私自身には、それがオの相で体験されてもいる（自分ならざる者に語らされているかのように感じられている）。

中動態的なやり方で、人は、まさに自らが言うべきことを見出す。それは、まぎれもなく私の言いたいことであつたはずなのに、他者性を帯びている。いや、その他者性こそが逆に、語られていることがほかならぬこの私にとっての真実であることの証にすらなっているのだ。

なぜ、言語をめぐるこのような経験について説明してきたのか。私たちが、生成 AI を日常的に活用するようになったとき、このような体験は、私たちの生活の中から徐々に失われていくだろう、と推測されるからである。言語をめぐる中動態的経験は、生成 AI との「会話」の経験に、いわば植民地化されてしまうのだ。どうして、そのように予想するのか。それは、二つの経験がある意味で似ているからである。「ある意味で」と述べたのは、両者はまさに「似て非なるもの」だからだ。確かに似ている。しかし違う。

あなたが、どうしても伝えたい、どうしても言いたい何かがあるのだが、適切な言葉が見つからず、それを具体的に表現

することもできず、苦勞していたでしょう。そこであなたはChatGPTのような生成AIに、漠然とした状況だけを教え、代わりに書いてもらう。たとえばあなたは、つい先日出会ったある人物に、今までに感じたことのないような複雑な思いを抱き、それを伝えたいのだが、よい言葉が見つからない。ChatGPTへの質問文の中に、その人物とあなたとの関係や出会いの状況などを書き入れておけば、ChatGPTは、きっと巧みなラブレターを数秒で書いてくれるに違いない。あなたは、自分が書いてもこんなうまくは書けないだろうと感じ、それを「私の手紙」としてその人物に送るだろう。

ひとたび生成AIから回答をもらってしまえば、人はその段階で、自分の定かならぬ思考、自分の語りがたい感覚を、何としても言葉にしようとする努力を放棄してしまうだろう。生成AIの回答で十分だ、それこそが私が思っていたことだ、ということにしてしまうからだ。先に述べたように、私が、何とか言いたかったアイデアを「擱んだ (Disse)」と思うとき、言葉は、まるで他者からやって来たかのように感じられている。そして今、生成AIを使ったときにも、言葉は、ほんとうに他者からやって来ている。目の前にあるこの機械から、である。人間の心理に本来、他者からやって来たかのように感受される言葉をこそ、「私のもの」として反転して受け取る傾向性があるがために、人は、機械という他者から出て来た言葉を、「私のアイデア」として採用することにさしたる抵抗を覚えない。

<sup>E</sup> 人間の思考の自律性、思考の自由は、能動的なものではなく、中動(態)的なものである。外(他者)からやって来たと感じられる言葉を通じてこそ、「私の思考の真実」が表現される。だが、中動態的な経験は、容易に受動態へと転化してしまう。このことが、生成AIの影響に対する人間の脆弱性(せいじやく)の究極的な原因となっている。自律性がもとも中動態的な構成をもつがゆえに、人間の思考は、生成AIに受動的に影響され、その回答に誘導Fされやすいのだ。

だが、本来の中動態的な言語経験と生成AIをめぐる言語経験とでは、根本的な違いがある。前者における、「語り得た」ときの究極の欲びは、後者からは得られないだろう。真に語りたいたいこと、語るに値することは、もともと語りがたいこと、語り得ないことであった。それを何とか言葉にしようとするれば、非常な苦しさを味わわなくてはならない。ときには諦め、

沈黙の方へと撤退する。しかし何とか語り得たとき、満足できる水準の言葉が得られたとき、人は、自分で自分に驚くともにも、強い歓びを感じるだろう。しかし、生成AIに文章を作ってもらったときには、そうした感情はまったく得られない。生成AIに流暢なラブレターを書いてもらったり、そつがないエッセイを書いてもらったりしてうれしいと思いかもしれないが、それは、あの「語り得た」というときの爆発的な歓びに比べようもない。

こうした違いはどうして生ずるのか。歓びの原因となっている機制は、他者性と自己性の短絡にある。私の中にはもともとない、外（他者）からやってきた言葉が、しかし、私の内的な真実を言い当てていると納得したときの眩暈めまいがするような感覚が、歓びをもたらしている。疎遠であることと内密であることとの通底が、歓びの源泉だ。

**G** 生成AIに書かせたときには、こんな極端な短絡は生じない。人は、生成AIが書いたこと（の一部）を、「私のエッセイ」「私の企画書」「私の手紙」等として他人に提示するかもしれないが、しかし同時に、これを書いたのは私ではなく、この機械の方であるという冷めた認識ももち続けるからだ。

（大澤 真幸 『生成AI時代の言語論』一部変更）

注一 バートランド・ラッセル・・・（一八七二～一九七〇）イギリスの哲学者・論理学者・数学者。一九二一年頃より  
オットライン・モレル夫人と愛人関係にあった。

注二 オットライン・モレル夫人・・・（一八七三～一九三八）多くの文学者・芸術家の精神的・経済的な後ろ盾になっ  
たイギリスの貴婦人。

注三 ルイ・アルチュセール・・・（一九一八～一九九〇）多くの哲学者に影響を与えたフランスの哲学者。晩年に偶然  
の唯物論を唱えた。

問一 空欄

ア

イ

ウ

に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選

び、その記号を解答欄

14

にマークせよ。

14

① ア ただし

イ ゆえに

ウ もちろん

② ア だが

イ だから

ウ つまり

③ ア もちろん

イ つまり

ウ ただし

④ ア ゆえに

イ だが

ウ だから

問一 空欄

エ

オ

に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号

を解答欄

15

にマークせよ。

15

① エ 受動態

オ 能動態

② エ 能動態

オ 中動態

③ エ 能動態

オ 受動態

④ エ 受動態

オ 中動態

問三 傍線部Aに「思考があつて、それが言語として外化されているのではなく、語ることを通じて、思考が明晰なものとして形成される」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

16

16

- ① 深い考察を伴う理解が時間とともに熟成されることで、あるとき突然一つの全体像として明確に捉えることができるようになること
- ② 内面的な感覚や直感を思いのまま口に出していくことで、伝えるべきことが何であるのかを他人に明確に説明できるようになること
- ③ 口に出して表現しようとする過程を通じて、それまでは漠然としていた思いや考えが、明確な輪郭を伴って把握できるようになること
- ④ 語ることをきっかけとして、日常的にたくわえられた知識や経験が自然に組み合わせたり、明確な判断や対応が即座にできるようになること

問四 傍線部Bに「自分が書いてしまったことを通じて初めて、自分が本来書きたかったことが何であったかを自覚する」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

17

17

- ① 思考の顕在化は潜在意識の探索状態で進められるため、まずは書くことによって無意識を呼び起こせるから。
- ② 思考の体系化は思いを整理する中で進められるため、まずは書くことによって思考の土台を整えていけるから。
- ③ 思考の言語化は自己内の手探り状態で進められるため、書かれたことで書きたかったことが形を得ていくから。
- ④ 思考の具体化は構想が曖昧な中で進められるため、書かれたことで思考の全体像が把握できるようになるから。

問五 傍線部Cに「あるアイデアを掴む (grasp) 者は、自分が成し遂げてしまったことに驚かされる (surprise) させられる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を

解答欄

18 にマークせよ。

18

- ① 言葉を使う行為のなかで、意図しない自分の言葉を通じて自分の内面で明確化されていなかった感情や考えが把握でき、それらを表現しえた結果に感動するということ
- ② 言葉を使う行為のなかで、愛するものへの言葉を通じてのみ曖昧であった自分の感情を把握することができ、人を愛することやその感情を持つ自分に感動するということ
- ③ 言葉を使う行為のなかで、言葉がもつ本来の意味を把握しようとする努力を通じて新たな気づきが生まれ、自分が努力できるということや新たな気づきに感動するということ
- ④ 言葉を使う行為のなかで、他者からの教えを自分の考えへ展開することを通じて、他者の教えを超えて自身の思考や感性を広げることができ自分の実力に感動するということ

問六 傍線部Dに「言語をめぐる中動的経験は、生成AIとの『会話』の経験に、いわば植民地化されてしまう」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

19

19

- ① 思考の言語化は、能動（思う）と受動（思われる）の中間状態、いわば愛する者との相互理解の形で行われるが、その関係の相談役の位置に人ならぬAIが外から容易に入り込んでくるということ
- ② 思考の言語化は、能動（話す）と受動（話される）の中間状態、いわば第三者との語り合いの形で行われるため、第三者の位置に人ならぬ議論相手となるAIが外から容易に入り込んでくるということ
- ③ 思考の言語化は、能動（語る）と受動（語られる）の中間状態、いわば内なる他者とのやりとりの形で行われるため、その他者の位置に人ならぬ語り相手となるAIが外から容易に入り込んでくるということ
- ④ 思考の言語化は、能動（問う）と受動（問われる）の中間状態、いわば自分自身との内的対話の形で行われるが、知識不足の状態を補う便利屋の位置に人ならぬAIが外から容易に入り込んでくるということ

問七 傍線部E「人間の思考の自律性」で始まり、傍線部F「誘導されやすいのだ」で終わる段落があるが、この段落の解

釈として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 20 にマークせよ。

20

① 生成AIから回答をもらうことは機械という他者から言葉を受け取ることであるが、入力する言葉自体は自分のものであるため、生成AIの回答は自分の考えそのものであると思ひ込み、それを全面的に受け入れてしまうということ

② 生成AIから回答をもらうことは整理された模範解答を得ることであるが、この経験は自分が真に言いたいことを伝えられた時に感じる何とも言えない歎びと類似しているため、生成AIの回答は違和感なく受け入れられやすいということ

③ 生成AIから回答をもらうことは第三者から言葉を受け取ることであるが、真に言いたいことはしばしば第三者の助言によってもたらされるので、両体験の区別がつかず生成AIの回答が受け入れられやすいということ

④ 生成AIから回答をもらうことは自分以外のものから言葉を受け取ることであるが、無自覚な思いを語るときに現れる他者性を帯びた言葉と同じように認識されやすく、両者の区別がつきにくいいため生成AIの回答を受け入れられやすいということ

問八 傍線部Gに「生成AIに書かせたときには、こんな極端な短絡は生じない」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄

21 にマークせよ。

21

① 生成AIはあくまで機械という外なる他者なので、自問自答を経た自己による内なる他者の発見にはつながらないから。

② 語り得ることで未知との遭遇ができるが、生成AIの出力からは既存のデータしか得られず未知の現象に出会えないから。

③ 語り得ることには時間と労力を要するが、生成AIからの回答は入力するとすぐに答えが返ってきてしまうため達成感がないから。

④ 生成AIは時に誤った情報を提供してしまうので、生成AIを用いながら実施する内的対話によって得られた結論が正しいとは限らないから。

問九 本文の内容に合致するものを次の選択肢の中から一つ選び、その記号を解答欄 22 にマークせよ。

22

① 自己内の中動態的な言語経験を通じてのみ真の歓びを味わうことができるため、他者である生成AIの回答がいくら完璧であっても、その回答からは真の歓びを味わうことはできない。

② 思考を言語化しようとする努力そのものを通じてのみ真の歓びを味わうことができるため、生成AIを用いてばかりでその努力をしなければ、真の歓びを味わうことはできない。

③ 議論を通じた中動態的な言語経験によってのみ真の歓びを味わうことができるため、一方的な生成AIとの会話では白熱した議論が開発されず、真の歓びを味わうことはできない。

④ 人は常に能動的に言語を行動に移すことで真の歓びを感じる生き物なので、生成AIを自ら積極的に取り入れたとしても、生成AIとの対話からは真の歓びを味わうことはできない。

問十 筆者の主張について説明した次の文章を完成させるよう、各欄に入る最も適切な選択肢を一つずつ選び、その記号を

解答欄  から  にマークせよ。

思考の言語化は  という形をとっている。それは  との対話のようなもので、その過程で未知の  が見出される歓びを味わうことができる。人格を持たないAIはその  の位置に入り込みやすいが、それはあくまで機械という  には変わりないので、前述の歓びはもたらさない。

- 
- 
- 
- 

- ① 能動態
- ② 受動態
- ③ 中動態
- ④ 「掴む」
- ⑤ 「驚く」
- ⑥ 現象
- ⑦ 自己
- ⑧ 内なる他者
- ⑨ 外なる他者

